

古文

○歴史的仮名遣い

・語頭と助詞以外の

は、ひ、ふ、へ、ほ↓わ、い、う、え、お

例 あはれ↓あわれ 思ひ出↓思い出

・ゐ、ゑ、助詞以外のを↓い、え、お

例 ゐなか↓いなか こゑ↓こえ

・ぢ、づ↓じ、ず

例 ふぢの花↓ふじの花

・くわ、ぐわ↓か、が

例 さんぐわつ↓さんがつ

- ・ローマ字に直したとき、

— a u ↓ o u — i u ↓ y u u — e u ↓ y o u

例 やうす(y a u s u) ↓ ようす(y o u s u)

あやしう(a y a s i u) ↓ あやしゅう(a y a s y u)

けふ(k e h u) ↓ きょう(k y o u)

○読解時に気を付けるポイント

- ・主語にチェックをする

↓古文は主語が省略されている場合がよくあるため、**人名や人を表す言葉**が出てきたら必ず丸で囲み、「誰がしゃべっているのか、行動しているのか」を把握する。

- ・助詞を補いながら読む

↓主語と同じように助詞も省略されていることが多い。「**は、が、を**」などの助詞を自分で補いながら読めるようになる
と内容をつかみやすくなる。

例 光源氏、笛吹きたり。 ↓ **光源氏が、** 笛を吹きたり。

・係り結び「ぞ、なむ、や、か、こそ」

文末中に係助詞（ぞ、なむ、や、か、こそ）があるときは
文末は終止形で終わらない。

文末は次のようになる

ぞ、なむ、や、か↓連体形

こそ↓已然形（今の仮定形）

それぞれの意味

ぞ、なむ、こそ↓強調

や、こそ↓疑問、反語

例 朝はひときはめでたし。
← （朝は一段と素晴らしい）

朝ぞひときはめでたき。
← （朝こそは一段と素晴らしい）

いずれの山か天に近き（どの山が天に近いのだろうか）
彼に勝るものやある。（彼に勝るものがあるだろうか、い

やいない。）